1700年頃に描かれた比叡山の全図（叡山文庫所蔵）

# 200年前の偉業を学び未来へと踏み出す

我が国初となる日本全土の実測地図『第日本沿岸輿地全図』を伊能忠敬（１７４５～１８１８）が完成させたのが２００年前の１８２１年。７月に完成したその地図は作成にあたる記録書14巻とともに幕府へ上呈された。その後日本の地図制作は、その精度を益々向上させ、ＧＰＳ測量に必要となる重要な基本情報をもたらした。さらに現在も、データが不十分な点は情報収集がなされ、実測した地図をデータ化して補填。我々の生活環境をより良いものにしてくれている。

その基本は忠敬の偉業が根本にあることに間違いがない。忠敬は家業である酒造・金融業を49才で息子景敬（かげたか）に譲り、隠居の身となってからは、すぐに天文学を学ぶため江戸へ移住。息子ほど年の離れた師に弟子入りし、天体観測と歩測法による距離測定の計算方法を会得した。寛政12年（１８００）に私財を投じて、蝦夷地および東北・北関東の測量を開始。御年55歳。現在（いま）なら現役世代だが、現代より寿命が短かった当時の状況からすれば驚愕する年齢である。その翌年からは幕府の幕府直轄事業となり、実直な性格と強い使命感より17年10回の実測事業に到った。忠敬作成の家訓（１７９１年）には

第一　仮にも偽りをせず、「孝悌忠信」にして正直たるべし
（親や目上の人に誠意をもって伝えること、嘘をなく、正直でいること）

第二　身の上の人は勿論、身下の人にても教訓異見あらば急度相用堅く守るべし
（役立つ事や正しい意見は採用し遵守すること）

第三　徳敬謙譲とて言語進退を寛裕に諸事謙り敬み少も人と争論など成すべからず。
（誰に対しても遜り、争論なく物事に対すること）

まさしく〝忘己利他〟である。苦労人とも云える人生の中、自らの力量によって家を守った彼の家訓はいまの時代にも必要不可欠なものであるが、その中でも、第二家訓は、地図精度の向上に励む次世代を担う内弟子たちへの教育に繋がる注視すべき点である。

明治まで人目に触れることが許されなかった地図は、今日の情報システムの基盤となって、さらなる進化の一因として役立っている。見ること知ることが出来なかった物・箇所を把握し知識を深め、さらに進化して未開地を照らす。

２００年前の偉業を学び、一人一人が実直な努力と新しい社会観を身に着けて前へ進みたいものである。

比叡山時報

発行所
比叡山時報社
jihoh@deluxe.ocn.ne.jp
大津市坂本本町4220
郵便番号 520－0116
電話　077－578－0001
振替　00970 －2－ 9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会　報
年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

令和3年比叡山から発信する言葉
自他心を同じくす
自他同心

ご購読はこちらから

# 比叡山と十二年籠山行

伝教大師1200年大遠忌記念

―後編―

## 侍真僧、渡部光臣師に聴く
## 十二年籠山行から得られたこと
### 当り前の事をもう一度考えてほしい

「比叡山で最も清浄なる地」と称される宗祖伝教大師御廟所「浄土院」。この地には1200年を経て、大師が今もなお生き続けておられるがごとく、日々、「侍真」と呼ばれる僧によりお給仕が続けられている。本特集では、先月より引き続き、現役の侍真として真に道心ある菩薩僧を目指す渡部光臣師より、行に入るきっかけや、日々の行から会得した体験、また今後の自らが進むべき道をお聴きする

延暦寺一山本行院住職
浄土院侍真　渡部光臣師

### 十二年籠山への第一歩
### お大師さまに「好相行」へと導かれる

僧侶となったきっかけといいますか、大学生のころから仏教に興味があり出家を考えておりました。比叡山で一般の在家から延暦寺の僧侶を養成する「叡山学寮」の制度を知り、山形県から半年かけての旅路のなか、四国のお遍路を経て学寮へと入寮いたしました。

学寮での修行の日々、卒業後には再び旅に出ようと思っておりましたが、先輩より「十二年籠山行」を遂業された112人目となる侍真僧で、当時叡山学院の院長をお勤めであられた、堀澤祖門師より講大僧正の御執筆による御本を手渡されました。拝読していうちにだんだんと「好相行」に興味をもち、「好相行とは行かないまでも山で籠りたい」と思い始め、それを機に一山住職になろうと決心いたしました。

その後、当時学寮の行監であられた福惠善高師（一山双厳院住職）から「十二年籠山行」をやってみるか？と聞かれ思わず「やりたいです」と答えてしまいました。今から考えると、自分の意思よりもお大師さまのご意思に導かれたのだと思っております。

好相行へ入行した際は、無心で五体投地を繰り返しました。仏さまを感得するまで終わりのない「不退の行」ですから、なかなか仏さまが現れて頂けないことに「いつになったら」と絶望感に襲われたり、焦燥の日々が続きました。そのような状況のなか「一度気持ちを切らせてしまうと取り戻すのは難しい」と自分に言い聞かせ、気が散らないようにとひたすら集中していたことを覚えています。

12年間の籠山行に辛いことはなかったです。世間一般の方と比べると、礼拝を日々日常で勤めなくてはならないということは大変かもしれませんが、会社に勤めて営業等のノルマに追われることはないので辛くはないです。逆に社会で働かれている方々のほうが、ストレスによるうつ病の発症があったり、遂には過労死であったりと、どれだけ大変なのかと案じています。

閉門後の静寂のなか、拝殿にて夕課の勤行を修する

### 人と比べてはいけない
### 心の持ち方ひとつで物事は変わる

この国に生まれて育った環境をありがたく思い、無いものを数えるのではなく、有るものを数える。そしてその部分を基に、今自分が困難の時代になせる事を考える。それによって自分自身が成長し、幸せにつながるのではないかと思います。現在は、「当たり前の事」になかなか感謝できないようになってきている。難しいことではありますが、一つ一つの見方を変えると不幸な状況が幸せを生むかもしれません。

（わたなべこうしん）
昭和47年6月兵庫県生まれ。山形大学理学部地球科学科卒。会社勤めを経て平成14年4月、叡山学寮第5期生として入山し、同年10月に得度受戒。その後比叡山行院、叡山学寮、本山交衆の諸課程を遂業し同21年4月、本行院住職に就任。

同年、6月16日、「好相行」へと入行、75日目の8月29日午後1時頃、「好相」を感得。これが先達の宮本祖豊師により証明され、9月11日、戒壇院にて大乗菩薩戒（十重四十八軽戒）を自誓受戒。その後浄土院で侍真僧として十二年籠山行へと入行し、令和3年4月1日同行を遂業。

### お大師さまを感じた瞬間
### 「ありがたい」という気持ちが降り注いだ

お勤めをしている時に直感でお大師さまからメッセージを受け取ったように感じたことがありました。直感なので言葉にするのはとても難しいのですが、「ご遺誡」にある「口に麁言無く、手に笞副せず、今我が同法、童子を打たずんば、我が慢に大恩なり、努力めよ、努力めよ」の部分のような、意訳すると「僧侶たる者は慈鳴ったり、汚い言葉で罵ったりせず、いつも穏かでありなさい」というイメージを受け取った気がしました。その瞬間、「ありがたい」という気持ちが降り注ぎ、幸福感に包まれたことを覚えています。

行を重ねるにつれ、とにかく「ありがたい」という気持ちに満ち溢れ泣きそうになることが増えてきています。五体満足でお大師の前でお勤めすることができます。それは先人たちが生きやすい環境を作ってくれたおかげです。我々は現在、不自由な生活できています。文明の利器は然り、お金を払うと簡単に食べ物を買うことができ、危険性も考えずに口に入れることができる。行の経験からそれがどれだけありがたいことなのかを理解できました。そして皆さまはその事をもう一度よく考えて頂きたいと思うようになりました。

「弱肉強食」であった恐竜や動植物だけの時代が数億年も続いたのは「欲」を持たなかったからだと思うのです。動物はお腹がいっぱいになればそれ以上求めることはしないのです。しかし文明を持った人間の時代は数万年で疲弊してきている。いや、縄文時代にはまだ共同生活で貧富の差が無かったと言いますから、ほんの三千年ほどの間でしょうか。これら全ての元凶は「欲」を持つこと。欲を持つから奪い合うのです。人間はいくら頑張っても眠れる時間と一度に食べられる飯の量は決まっています。三人前は食べることができても十人前は食べられないのです。「欲」を持っても人間のできることなんてたかが知れています。それを認識することが必要だと思います。

本年4月1日に執り行われた十二年籠山行遂業式

皆さまには、何かをしてもらうのを待つのではなく「自分が何をなせるか」ということを考え、これからの日本の明るい礎となっていって頂きたい。もっと日本人が出来ること、世の中のためになることがあるはず。そして、今、こうやって命を保っているありがたさをもう一度みつめ直してほしいのです。

物事を解決する方法というのは二つの方法しかないと私は思っています。「外的要因」で変えるか、あるいは「内面の心持ち」で変えるしかないということです。

「貧乏」を例にとれば、貧乏で無くなるには「お金を稼いで富を得ればよい」。これが外的要因です。しかしお金が無くても自分が「貧乏」と思わなければそれは貧乏ではありません。ほとんどの方々は外的な要因で貧しさを埋めようと思われるでしょう。しかし、人と比べるから貧乏と思うのであって、貧乏と思わなければそれは貧乏ではない。人と比べて「無いない」と嘆くことはないのです。

このように「物事は自分自身の心持ちを変える」という内的要因を持てば、180度ガラッと考えを変えることができる。つまり自分自身の考え方をいかに変えていくかだと思います。一歩引いてみて、広い視野で物事を色々な方向から見ることができる。お大師さまが育てたかったのはそのような人間かもしれません。

### 今後の「利他行」について
### エネルギー問題解決で世界平和へ

私は大学の理学部で地球科学を学んでおりましたので、エネルギー問題に興味をもっています。国と国が争う最も大きな原因の一つは「エネルギー」の奪い合いと言われます。逆に考えると自前でエネルギーを供給できれば、争う原因の大きな一つが解決できるということになります。太陽光や水力等でエネルギーを作り出す。水力発電であれば、メンテナンスさえしっかりとすれば24時間発電でき、景観を損なうことも無い。ほんの小さな手段ですが、これも世界平和の一つの方法であると思います。

そのためにはまず、出来るのであればお寺が自前でエネルギーを作れるようになりそれを広めていけることが理想です。そもそも中国に渡った当時の留学僧は、経典と共に最先端の科学技術を持ち帰りそれを人々に広めるのが役目の一つでした。弘法大師空海さまが最先端の土木技術や専門的な鉱物の知識を我が国に持ち帰り人々を救われたのは有名なお話です。

エネルギー問題は私の生涯をかけた今後の「利他行」として非常に興味をもっている事案です。仏事のみならずエネルギー問題や食料問題、また地域のボランティア等、寺院と僧侶がいかに世の中や社会に対し、どうアプローチしていけるかを考えていかなければならないと思っています。それが本来の仏教の姿だと思いますし、そのすべての実践が菩薩行へと繋がると思っているからです。

伝教大師のご命日にあたる6月4日、この日だけ御廟の門扉が開かれ、侍真僧が一番茶を献じる

叡山学寮在寮中のひとコマ（二宮写真館提供）

### 「恒に仏事を作さん」
### 祈りでこの国は護られている

お大師さまのお言葉のなかで印象に深いといいますか、まさにお大師さまを表しているお言葉と言いますと、『願文』の結語にある「恒作仏事」（恒に仏事を作さん）というお言葉でしょうか。

これは、お大師さまが新しい仏教のあり方を希求し比叡山へと入られた際に修行の目標をまとめられたもので、「自我偈」（『法華経』如来寿量品）の最後に「以何令衆生　得入無上道　速成就仏身」（どうすれば人々を最高の教えに導き、一刻も早く仏に成るだろうか）と常に念じている）とあり、このお言葉はお釈迦様の思いと同じことを意味していると思います。

常に衆生救済を目指しておられたお大師さまらしいお言葉として感銘を覚えました。

また、お勤めをしている際には、心の中では「天下泰平　万民快楽」を祈っております。私にそれを実現する力があるとは毛頭にも思っておりませんが、しかし、我が国にはたくさんの寺社仏閣があります。私は朝課のお勤めをしながら「今頃高野山でお勤めが始まったかな。永平寺でも始まったかな。神社では祝詞が始まっただろうか」等と思っています。比叡山だけでなく常に全国津々浦々で、人々の幸せが祈られている。また、各家でもおじいさん、おばあさんがお仏壇に祈っている。そのネットワークが我が国を覆っている。大袈裟な話しになってしまいますが、その祈りの総体で日本は護られている。そんな気がしています。